

青年期における自己嫌悪感の発達的变化

佐藤 有 耕¹

DEVELOPMENTAL CHANGES OF SELF-DISGUST DURING ADOLESCENCE

Yuhkoh SATOH

The purpose of this study was to clarify developmental changes of self-disgust during adolescence. One hundred and twenty-three adolescents described their experiences of self-disgust, and a self-disgust rating form was constructed from the contents of their responses. A sample of eight hundred and sixty-nine adolescents completed this form; the adolescents included junior and senior high school students, and college students. The results were analysed by means of procrustes factor analysis. The main results of the second-order factor analysis conducted among the three different age groups were as follows: 1) Among junior high school students self-disgust seemed to be understood as one factor; 2) Among senior high school students self-disgust was made of two factors: self-disgust to oneself and self-disgust regarding others; 3) Among college students, self-disgust was understood as three factors: lack of self-confidence, difficulty of self-control, and insufficient self-understanding.

Key words: self-disgust, adolescence, developmental changes.

問 題

自我のめざめによって「見る自己」と「見られる自己」の分裂を知った青年に、自己嫌悪感という感情がみられることは知られている。青年期の自己対象化について検討した研究に堤 (1982) がある。そこでは20答法で得られた記述が、自己肯定的—自己否定的という次元から分析されている。中学・高校・大学生の記述を比較した結果からは、“一般に年長になると内省化が進み、自己嫌悪的、自己懷疑的表現が増す”傾向がみられた。嫌悪という情動について論述した Izard, C.E. (1991) も、“児童期にはまったく気にならなかった自分の性格特徴が、青年期には嫌悪を感じさせる対象になることがある”と指摘している。また、託摩 (1978) は自己嫌悪感が青年期に強く現われる理由を3点挙げている。①自分に対する期待の高さ、②人との比較を行うことが多いこと、③自分の客観的姿を把握していな

いことである。そのうえで託摩は、“程度の差はあってもほとんどの青年が自己嫌悪感をもっている”と結論づけている。

このように自己嫌悪感を感じることは、青年の心理的特徴としてとらえられてきた。なかでも青年の自己嫌悪感、自己への関心の高さや自己を見つめることの多さとの関連が言及されている。たとえば、青年が自己探究に熱心のあまり、強い自己嫌悪感や自己否定感をもつこと (中澤, 1982) が指摘されている。自分を見つめ、自分を知らうとすることは、人格形成期にある青年には必然的なことである。だが、その過程の中で多くの青年は自己に不満を持ち、自己に失望し、自己嫌悪感を感じていると考えられる。青年の自己嫌悪感を理解し、その変化を解明していくことは、青年の人格形成の過程を理解するうえでも役立つことと考えられる。

さて、青年はどういう自分をいやだと感じているのだろうか。自己嫌悪感、西平 (1973) が“自己の存在そのものが、羞恥・悔恨・慚愧・卑屈などの感情に動

¹ 筑波大学心理学研究科 (Doctoral program in psychology, University of Tsukuba)

かされて、なんともいたたまれない気分になる”と表現するように、自分自身に向けられた否定的で複雑な感情である。残念ながら、この感情についての先行研究は乏しく、青年が感じている自己嫌悪感の内容が十分整理されているとは言えない。また、青年期の中でも、その感情内容が質的に変化していくのかどうかについても、参考となる資料は少ない。そこで本研究では、まず青年に自分が感じている自己嫌悪感について記述してもらう。記述の収集においては、幅広く自己嫌悪感の内容が得られた方がよい。そのため本研究では、複雑な感情である自己嫌悪感に広く対応できるよう、次のように定義をしておく。ここでは自己嫌悪感を「自分が、自分で、今の自分がいやだと感じること」とする。この定義にしたがって行われる本研究の目的は以下の3点である。(1)実際に青年が感じている自己嫌悪感の内容を整理してまとめ、自己嫌悪感をとらえるための仮説的枠組みを設定する。続いて、調査のための自己嫌悪感項目を作成する。(2)中学生から大学生までの学校段階間に共通してみられる自己嫌悪感の内容を明らかにし、自己嫌悪感の内容の発達的变化と量的な変化を明らかにする。(3)学校段階間に共通してみられた自己嫌悪感を、それらの相互関連から分析する。さらに、前述した仮説的枠組みを用いて自己嫌悪感の発達的变化を、構造的な側面から明らかにする。

予備調査

目的

青年期の自己嫌悪感の発達的变化を解明するために、予備調査として以下の検討を行う。(1)青年が感じている自己嫌悪感の記述を分類し、整理してまとめる。(2)まとめられた内容から、自己嫌悪感をとらえるための仮説的枠組みを設定する。(3)記述を分類し整理した結果から、自己嫌悪感項目を作成する。

方法

自己嫌悪感についての記述を収集するために、「私が(自分で)今の自分がいやだと感じるのは…」という誘導文を提示する文章完成法の手法が用いられた。学校段階間の変化を検討することを考慮して、高校生と大学生を調査対象とした。回答者は高校生63名(M=24, F=39)、及び大学生60名(M=26, F=34)であった。

結果

合計123名の高校生と大学生から得られた222個の自己嫌悪感に関する記述を整理した結果、次の7グループに大別された。①自分の気持ちを素直に表現できないことをいやだと感じる自己嫌悪感。②人間関係がうまく

できないことをいやだと感じる自己嫌悪感。③他者への意識が過剰になっていることをいやだと感じる自己嫌悪感。④他人を傷つける対人的未熟さをいやだと感じる自己嫌悪感。⑤自分に対する厳しさの欠如をいやだと感じる自己嫌悪感。⑥自分の予定や計画を遂行できないことをいやだと感じる自己嫌悪感。⑦自分の性格や自分の状況をいやだと感じる自己嫌悪感。以上の7つに大別することができたが、それらをさらにまとめることを試みた。その結果、①②③④の人との関係の持ち方への不満から生じる自己嫌悪感、⑤⑥⑦の自己のあり方についての失望から生じる自己嫌悪感の2つにまとめられた。ひとつの感情を対人的な要因と、対自的な要因とに分けてとらえる方法は、孤独感(落合, 1989)、罪責感(高橋, 1994)などの研究にもみられる。複雑な感情を分析していく際の基本的なとらえ方と言える。そこで本研究でも、自己嫌悪感を感じさせる要因を対人的と対自的な要因の2つに分けてとらえることにした。これを自己嫌悪感の発達的变化を検討していくうえでの仮説的枠組みとした。続いて作成された自己嫌悪感項目は、大別された7グループごとに7項目ずつ、合計49項目であった。

従来の自己嫌悪感に関する論究では、西平(1959)が“性的な生理現象に対する不快視”からおこる自己嫌悪感の存在を指摘している。しかし、予備調査で青年から収集した資料には、そのような内容の記述はみられず、本研究の項目には含まれなかった。

研究

目的

自己嫌悪感の発達的变化を解明するために、以下の検討を行う。(1)中学から大学までの学校段階間に共通してみられる自己嫌悪感を明らかにし、学校段階間での差異を明らかにする。(2)学校段階間に共通してみられた自己嫌悪感について、量的な変化を明らかにする。(3)学校段階間に共通してみられた自己嫌悪感の相互関連を分析する。さらに、予備調査から得られた対人的と対自的な要因に基づく仮説的枠組みを用いて、自己嫌悪感の発達的变化を構造的な側面から明らかにする。

方法

質問紙の構成 予備調査で作成された49項目は、「はい」「どちらかというとはい」「どちらともいえない」「どちらかというといいえ」「いいえ」の5件法で回答された。各項目はすべて、本研究での定義にしたがい「～自分をいやだと感じる」という語尾表現になっていた(論文では、「をいやだと感じる」の部分を省略して記載)。

調査対象 中学生群 (平均年齢 $\bar{X}=13.2$ 才) は公立中学 2 校から 2 年生 200 (M104, F96) 名。高校生群 ($\bar{X}=16.3$ 才) は公立高校 2 校から 2 年生 369 (M=210, F159) 名。大学生群 ($\bar{X}=20.0$ 才) は私立大学生 186 名 (M173, F13), 私立短大生女子 63 名, 私立専門学校生 51 名 (M12, F39), 合計 300 名 (M185, F115)。調査時期は 1993 年 7 月。

分析方法 学校段階間の因子パターンを比較するために、斜交プロクラステス法による因子分析を行った。すなわち、すべての学校段階を込みにした回答者全体の因子パターンに、学校段階別の因子パターンが近似するように回転させた。因子パターンの一致・不一致の程度の判断には、一致係数 (Harman, H.H., 1976) を利用した。これらの方法により、因子パターンの差異を明確にすることができる。また、分析の対象となった項目はすべて自己嫌悪感の項目であり、潜在的因子が互いに直交しているという前提はない。より単純化した因子パターンに近づけるために、ここでは斜交解を用いた。

分析手続 (1)中学生群, 高校生群, 大学生群の 3 つを込みにした回答者全体のデータ行列について、因子分析を行った。調査項目が 7 グループから構成されていたことと、スクリー法による判断とをあわせ、因子数の範囲を 4~7 と仮定した。因子数 4~7 の間で、初期解を反復推定した。その結果、最も解釈がしやすかった 6 因子解を採用した。(2)回答者全体のデータ行列について、共通性を反復推定して得られた主因子解を、プロマックス回転した。(3)プロマックス回転された回答者全体の因子パターンを標的行列として、3 つの学校段階ごとに斜交プロクラステス回転した (一次因子分析)。(4)一次因子分析の結果、学校段階間に共通してみられると判断された因子については、回答者全体を因子分析 (プロマックス解) した際の因子得点を用い、因子に対する量的な関与を比較した。(5)一次因子分析から得られた因子間相関について、共通性を反復推定して主因子解を求め、プロマックス回転した (二次因子分析)。

結果と考察

1. 一次因子パターンの学校段階間比較 回答者全体と 3 つの学校段階別の因子パターンから、一致係数を求めた結果が TABLE 1 である。これをみると、中学生群では第 1~第 4 因子までは .95~.92 と十分な値を示したが、第 5, 第 6 因子は .70, .66 であった。この 2 つの因子については、回答者全体と中学生群との間で因子パターンが一致したとは言えなかった。因子の解釈も困難であったことから、解釈の対象とはしなかった。

高校生群では .99~.90, 大学生群では .99~.88 と 6 因子すべてに十分な数値が得られた。高校生群と大学生群は 6 因子すべてに関して、回答者全体の結果と因子パターンの一致がみられた。一方中学生群では、回答者全体の結果と一致した因子パターンを持つ因子は 4 つだけであった。このように、回答者全体と各学校段階との間で、因子パターンの一致がみられた数には違いがあった。また、いずれの学校段階においても、各因子と、その因子に対応しない他の因子に対する一致係数は .36~.00 と低かった。一致係数の値からは、6 因子は互いに独立であるとみなされた。

TABLE 1 回答者全体と 3 つの学校段階との間における因子パターンの一致係数

	Fac.1 課題遂行 停 滞	Fac.2 他者への 配慮欠如	Fac.3 他者への 意識過剰	Fac.4 他者との 親和不能	Fac.5 他者への 表出不能	Fac.6 目標方向 不 定
中 学 生 群	Fac.1 95	05	01	-04	15	10
	Fac.2 05	95	01	08	-06	06
	Fac.3 01	01	95	06	10	05
	Fac.4 -05	09	06	92	27	06
	Fac.5 20	-08	14	36	70	10
	Fac.6 15	08	07	08	11	66
高 校 生 群	Fac.1 99	01	04	-02	06	05
	Fac.2 01	99	03	01	00	01
	Fac.3 04	03	98	07	01	-06
	Fac.4 -02	01	07	96	16	10
	Fac.5 06	00	01	16	96	-02
	Fac.6 06	01	-06	11	-03	90
大 学 生 群	Fac.1 99	02	02	00	04	03
	Fac.2 02	99	02	00	02	-01
	Fac.3 02	02	99	07	00	01
	Fac.4 00	00	07	96	21	00
	Fac.5 04	02	00	23	90	12
	Fac.6 04	-01	01	00	12	88

(小数点省略)

次に、一次因子の解釈を行った。標的行列とした回答者全体のプロマックス解因子パターンと、これに近似させた 3 つの学校段階別のプロクラステス解因子パターンを TABLE 2 に示した。回答者全体における因子分析結果の寄与率は、49.0% であった。第 1 因子は「36 なまけている自分 (.85)」「26 自分で決めたことをやらずにいる自分 (.78)」「19 やろうと決めたことに対して努力していない自分 (.76)」などに高い負荷を示した。この

TABLE 2 標的行列 (回答者全体) 及び 3 つの学校段階のプロクラステス回転後の一次因子パターン

項目の概要 (“～”をいやだと感じる”を省略)	全体(プロマックス回転後)						中学生群(プロクラステス回転後)						高校生群(プロクラステス回転後)						大学生群(プロクラステス回転後)					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F1	F2	F3	F4	F5	F6
36まげている自分	85	-02	-03	08	-18	00	68	12	-17	03	00	02	84	-07	06	08	-15	03	83	-03	00	-03	-13	02
26自分で決めたことをやらずにいる自分	78	-01	03	-01	-03	-06	65	12	-04	-07	-04	14	70	-01	11	-03	-02	-01	86	-08	02	-02	02	-12
19やろうと決めたことに対して努力していない自分	76	-02	-09	07	00	-07	76	-20	-14	22	03	10	65	-03	-02	-05	10	03	82	04	-14	06	00	-11
33やらなくてはならないとわかっていてもがんばれない自分	73	-01	00	06	-10	01	56	-02	13	05	-09	12	58	01	02	-03	-03	19	85	-05	-03	04	-08	-05
05計画したことを実行できない自分	71	04	-08	-05	11	-18	76	11	-06	-21	00	-22	70	09	-09	-07	10	-23	68	-02	-15	05	09	01
29精神がたるんでいる自分	71	00	-03	00	02	03	35	13	-04	-05	26	21	81	-14	03	03	-02	02	68	-11	-02	-05	05	07
40自分で決めたことをやりとげられそうにない自分	66	00	03	-09	06	11	62	06	03	-15	-01	19	62	-03	06	-18	10	29	72	-01	05	-01	06	-03
47やろうとしていることに全力で向かっていない自分	65	05	-12	04	-03	14	55	-03	-07	20	02	27	61	10	-13	-02	-07	25	74	02	04	-07	06	02
01生活がだらけている自分	63	-04	03	04	02	-09	54	-01	13	-10	24	-40	66	-07	01	08	12	-11	58	02	-02	02	-06	09
43自分に甘く、すぐに妥協してしまう自分	59	00	07	00	-08	09	54	09	13	-21	-05	17	66	02	05	13	-21	00	58	-01	09	-05	07	06
12やろうとしていることがなかなか進まない自分	58	-06	02	-06	15	-03	66	-15	13	00	02	-14	60	-03	-08	-16	27	-01	54	-03	-01	12	-04	06
22不規則な生活をしている自分	51	04	04	05	01	00	44	06	06	08	24	-18	51	07	-01	09	02	-01	51	00	09	00	01	05
08安易な、楽な道を選んでしまう自分	50	01	06	-06	08	02	59	-06	-01	-08	22	-03	62	03	-03	10	-10	-11	42	04	18	-10	12	10
15誘惑に負けてしまいがちな自分	45	02	11	-10	13	-04	46	-06	-01	-08	21	19	51	08	06	-05	11	-21	44	03	17	-06	05	01
23うそをついてしまうときの自分	28	21	07	-01	03	-01	20	31	17	-11	00	-01	28	20	11	08	-04	-04	34	18	-01	01	02	03
13人を傷つけるようなことを言ってしまう自分	-06	93	-06	-03	07	-07	-08	82	-13	14	10	-10	-07	92	-06	-05	08	-02	-04	91	01	-03	00	-02
48相手のことを考えずにきつことを言ってしまう自分	-04	87	-03	03	-10	08	-05	71	-03	09	-19	25	-04	88	02	00	-15	11	-01	90	-07	02	02	-02
34軽はずみなことばで人にいやな思いをさせる自分	04	83	01	-02	-08	05	28	65	05	04	-21	02	-02	77	08	00	-09	12	00	94	-05	-08	03	01
20人の気持ちを考えずに言いすぎてしまう自分	03	83	-05	00	02	-07	07	74	-10	00	-07	18	06	81	-03	01	-02	-13	00	87	-03	06	01	-07
06言わなくていいことまで言って人を傷つけてしまう自分	-03	80	01	-01	04	-08	02	71	-02	08	07	-19	-07	77	-02	03	14	-10	-03	83	06	-02	-11	00
27人に不快な思いをさせてしまう自分	07	63	02	13	-03	00	09	58	02	21	-10	05	02	56	13	08	-03	08	08	70	-03	07	06	01
41イライラする時に人にあたって迷惑をかけてしまう自分	10	44	11	-06	-02	05	05	46	17	-12	-03	09	16	51	03	-13	-01	04	09	38	12	04	01	03
09強がりを書いてしまう自分	01	40	19	-02	08	-01	-05	51	21	08	08	-11	12	47	08	02	08	-12	-05	28	26	-08	08	16
39周囲の目を気にする自分	-03	-08	91	-01	-04	03	-04	-08	88	-01	-11	12	-04	-10	88	01	-01	04	00	-04	91	-04	04	-03
32人からどう思われているかを気にして行動している自分	-01	-04	85	01	-04	-04	02	-07	71	09	-15	10	-01	04	84	00	-06	-10	-03	-09	87	04	-04	03
11人の目ばかりを気にしている自分	03	02	82	06	-02	-14	07	02	73	07	03	-18	02	02	82	08	00	-21	02	03	80	06	-04	-07
46人からの評価を意識しすぎる自分	04	-04	78	10	-13	03	05	-01	47	16	-05	-03	05	-04	81	14	-21	07	07	-07	88	03	-03	-07
04まわりからの評価を気にして行動している自分	03	03	72	09	-04	-11	06	01	55	10	06	-06	07	06	67	15	-01	-22	-03	00	76	02	00	-04
18人のことが気になってしまう自分	-03	08	59	-04	07	00	-05	08	47	02	06	-14	04	04	56	-03	07	02	-04	14	65	03	-04	00
25ついつい人と自分を比べてしまう自分	01	08	58	-09	06	08	-06	10	52	-17	15	24	02	08	52	01	05	09	05	09	65	-10	07	01
28自分の理想像と現実の姿との間に落差がある自分	16	01	29	-14	13	16	10	02	12	-24	48	40	12	-01	44	-31	20	22	20	08	24	09	-09	17
44無理をしている自分	-13	09	26	09	06	14	-16	-03	31	10	24	15	-20	07	21	09	10	25	-03	14	32	10	02	-02
21自分の理想の体つきとは違っている自分	14	-01	17	-08	13	10	17	02	10	-21	44	20	08	04	30	-22	20	10	17	00	07	14	-10	18
45まわりの人とうちとけることができない自分	-04	00	-01	87	-16	11	-07	02	01	68	02	29	03	05	-01	83	-13	15	06	-01	04	82	00	-02
24クラスになじめない自分	09	03	-03	79	-11	02	-01	04	-07	77	12	10	00	01	-04	71	02	09	16	05	07	77	-16	-09
38人と話すことが苦手な自分	-02	-08	-07	71	13	08	-11	02	-06	70	20	08	-02	-09	-06	65	17	11	01	-11	-02	70	25	02
10人とのつきあい方がへたな自分	-03	05	05	68	15	-09	-13	20	03	60	35	-11	00	01	09	64	15	-10	-08	04	03	74	16	02
03人とうまくつきあえない自分	-04	03	03	67	22	-11	00	17	00	60	30	-13	-02	06	03	61	30	-16	-14	-05	05	69	19	06
17まわりの人と自分の間にかべを作ってしまう自分	-01	01	06	66	06	00	10	04	02	63	20	-07	-05	01	11	62	06	05	-08	01	06	67	10	02
31人といっしょにいと気づまりしてしまう自分	-08	01	19	50	05	04	-15	00	33	35	30	03	-13	01	24	45	-01	16	-06	04	12	64	08	00
02自分の本当の気持ちを人に伝えられない自分	00	-01	-02	03	79	-06	14	-13	11	17	53	-03	-02	03	00	11	71	-09	04	01	-08	11	78	01
16思ったとおりのことを言えない自分	00	-03	-05	17	72	-08	15	-12	-04	31	34	12	-06	-04	-02	24	73	-08	05	-01	-03	26	60	-05
30自分の感情をそのまま表現できない自分	05	-03	00	16	52	06	14	03	06	26	15	13	06	-09	07	25	39	18	03	-05	-01	05	78	-02
37自分の気持ちに正直になれない自分	04	13	-05	00	51	17	09	18	17	07	12	19	13	09	-13	08	55	21	04	15	-01	02	54	05
07自分に自信が持てない自分	09	-10	27	08	39	-01	11	-25	24	40	39	01	14	-13	33	03	39	-10	05	01	19	18	28	12
14ものごとをすぐに決められず、迷ってしまう自分	17	-01	03	-03	31	14	26	-21	01	20	33	17	20	09	-10	-01	36	05	20	-03	12	02	16	21
49自分が本当にしたいことがよくわからない自分	00	-03	04	03	-03	80	23	09	17	07	00	28	13	01	-06	16	-03	66	03	-02	08	-05	07	73
42自分のやりたいことが見つからない自分	-04	-03	-09	05	01	80	24	11	-12	10	12	42	05	03	-13	17	-03	61	-01	-04	-10	-01	12	91
35自分でも好きになれないような性格がある自分	06	15	18	07	12	17	-03	20	27	03	08	25	09	18	18	08	10	18	11	14	11	15	12	15
因子間相関行列 課題遂行停滞 F1	F1	F2	F3	F4	F5		F1	F2	F3	F4	F5		F1	F2	F3	F4	F5		F1	F2	F3	F4	F5	
他者への配慮欠如 F2	51						49						51						47					
他者への意識過剰 F3	54	51					55	38					55	55					46	45				
他者との親和不能 F4	42	48	60				49	49	54				46	47	58				31	36	53			
他者への表出不能 F5	50	50	63	61			25	36	29	11			51	52	64	54			38	42	56	49		
目標方向不定 F6	54	41	45	41	42		29	20	23	29	14		45	35	40	31	38		41	31	44	35	26	

(小数点省略)

因子は、やろうとしているがやれていない自分に対する自己嫌悪感を表わすと考えられ、「課題遂行停滞」の因子とした。第2因子は「13人を傷つけるようなことを言ってしまう自分(93)」「48相手の事を考えずにきついことを言ってしまう自分(87)」などに高い負荷を示した。相手との適切な間合いをとることに失敗し、人を傷つけてしまう自分に対する自己嫌悪感を表わす因子と考えられた。そこで「他者への配慮欠如」の因子とした。第3因子は「39周囲の目を気にする自分(91)」「32人からどう思われているかを気にして行動している自分(85)」などに高い負荷を示した。自分に自信がもてず、他人の行動や他人の評価を意識してしまう自分に対する自己嫌悪感を表わす因子と考えられた。これは「他者への意識過剰」の因子とした。第4因子は「45まわりの人と打ち解けることができない自分(87)」「24クラスになじめない自分(79)」「38人と話すことが苦手な自分(71)」などに高い負荷を示した。この因子は、周囲の人とうちとけることができず、まわりになじめないでいる自分に向けられた自己嫌悪感を表わすと考えられた。そこで「他者との親和不能」の因子とした。第5因子は「02自分の本当の気持ちを人に伝えられない自分(79)」「16思ったとおりのことを言えない自分(72)」などに高い負荷を示した。自分を出すことをちゅうちょし、自分の気持ちを伝えることができない自分に対する自己嫌悪感を表わす因子と考えられた。これを「他者への表出不能」の因子とした。第6因子は「49自分が本当にしたいことがよくわからない自分(80)」「42自分のやりたいことが見つからない自分(80)」に高い負荷を示した。この因子は、自分がめざそうとする方向が定まらず、いま何をしたらいいかわからない自分に向けられた自己嫌悪感を表わすと考えられた。これを「目標方向不定」の因子とした。以上解釈した6因子のうち、第5因子「他者への表出不能」、第6因子「目標方向不定」は高校生群、大学生群だけにみられ、中学生群ではみられなかった因子である。

2. 学校段階間における因子得点の比較 学校段階別に因子パターンを比較した結果、中学生群の第5、第6因子を除いては、すべて回答者全体の分析結果と一致した。そこで、因子得点を用い、学校段階間での量的な比較を行った。第4因子までは3つの学校段階間で一要因の分散分析を行った。群間に有意差がみられた場合は、チューキーのHSD法による多重比較を行った。第5、第6因子については高校生群と大学生群との2群間でt検定を行った。因子得点の平均値な

どはTABLE 3にまとめて示した。まず「他者への配慮欠如」では、中、高、大と学校段階が進むにつれて、因子得点は減少し、3群間に有意差がみられた($F(2, 866) = 4.40, p < .05$)。多重比較した結果、中学生群と大学生群との間に有意差が見られた($Mse = 0.93, 5\%$ 水準)。次に「他者への意識過剰」では、高校生群の得点が最も高く、次が中学生群で、大学生群の得点は最も低かった。3群間に有意差がみられ($F(2, 866) = 3.38, p < .05$)、続いて多重比較した結果、高校生群と大学生群との間に有意差が見られた($Mse = 0.92, 5\%$ 水準)。最後に、第5因子の「他者への表出不能」でも、大学生群が高校生群に比べて因子得点が低く、2群間に有意差がみられた($t(667) = 2.72, p < .05$)。

TABLE 3 自己嫌悪感の因子得点の学校段階間における比較

因子名	中学生群	高校生群	大学生群	F値	t値
F1 課題遂行停滞	0.056(0.842)	-0.003(0.986)	-0.033(1.012)	0.51	
F2 他者への配慮欠如	0.137(0.892)	0.022(0.971)	-0.118(0.998)	4.40*	
F3 他者への意識過剰	0.042(0.846)	0.071(0.973)	-0.115(1.008)	3.38*	
F4 他者との親和不能	-0.013(0.917)	0.074(0.959)	-0.082(0.972)	2.24	
F5 他者への表出不能		0.081(0.942)	-0.119(0.949)		2.72**
F6 目標方向不定		-0.029(0.954)	0.044(0.893)		1.01

(* $p < .05$, ** $p < .01$) () 内は標準偏差

自己嫌悪感の因子パターンについては、高校生群と大学生群の間に一致がみられた。一方、自己嫌悪感の因子得点の比較からは、中学生群と高校生群の間には差がないことが示された。学校段階間でみられた差異は、「他者への配慮欠如」「他者への意識過剰」「他者への表出不能」の3因子で、大学生群の因子得点が低いという結果であった。前述した堤(1982)は、発達にともなって自己を否定的にみる傾向が増すことを報告している。しかし、本研究における因子得点の比較からは、大学生群で自己嫌悪感の得点が低いことが示された。この結果は堤の報告とは一致しなかった。堤とは別に、原田(1978)は日記資料の分析から、“16~17才の高校生には劣等感と自己嫌悪がかなり多くみられた”ことを述べている。本研究の結果は、20答法の記述を分析した堤の結果よりも、日記資料の分析による原田の見解に近いように思われた。だがこの3つの結果は、異なる方法によって導かれている。そのため、自己嫌悪感の量的な変化に関する結論は出せず、検討の余地が残された。

3. 二次因子パターンの学校段階間比較 一次因子パターンでは、中学生群の第5、第6因子を除いて、回答者全体の結果と学校段階別の結果の一致が確かめら

れている。しかしながら、TABLE 2 の下段に示した一次因子間相関をみると、第2因子と第3、第4、第5因子との間で、相関関係の強さにやや違いがみられた。そこで、因子間相関から二次因子分析を行った。正の固有値までを因子数決定の基準とすると、中学生群3因子、高校生群2因子、大学生群3因子となる。ただし、中学生群においては、3番目の正の固有値の値が非常に小さく、2番目と3番目の固有値の差がむしろ大きかったことから、因子数は2とした。学校段階ごとの二次因子分析結果は、プロマックス回転後の因子パターンをTABLE 4～6に示した。

TABLE 4 中学生群の2次因子パターン(プロマックス回転後)

	因子I	因子II
F4 他者との親和不能	81	-16
F1 課題遂行停滞	73	03
F3 他者への意識過剰	68	05
F2 他者への配慮欠如	57	17
F6 解釈不能	36	02
F5 解釈不能	00	96

小数点省略

TABLE 5 高校生群の2次因子パターン(プロマックス回転後)

	因子I	因子II
F3 他者への意識過剰	76	07
F5 他者への表出不能	73	06
F4 他者との親和不能	73	-03
F2 他者への配慮欠如	47	25
F1 課題遂行停滞	09	71
F6 目標方向不定	00	57

小数点省略

TABLE 6 大学生群の2次因子パターン(プロマックス回転後)

	因子I	因子II	因子III
F5 他者への表出不能	80	10	-19
F4 他者との親和不能	67	-13	16
F3 他者への意識過剰	62	05	20
F1 課題遂行停滞	-06	79	09
F2 他者への配慮欠如	29	42	-03
F6 目標方向不定	-01	07	69

小数点省略

これらを見ると、中学生群では2因子が示されてい

る。だが、一次因子分析において、すでに第5、第6因子は回答者全体の結果との一致係数が低く、解釈不能とされていた。仮に1因子として抽出した場合でも、第5、第6因子の負荷は.40に満たない低い値であった。したがって二次因子分析において2因子を抽出したTABLE 4の結果は、実質的には1因子と考えてもよいと思われる。中学生群においては、回答者全体の結果と一致していた4つの一次因子が、すべてひとつの二次因子にまとまった。次に高校生群においては、二次因子分析の第I因子に「他者への意識過剰」「他者への表出不能」「他者との親和不能」「他者への配慮欠如」の4つの一次因子が高い負荷を示した。第II因子には「課題遂行停滞」「目標方向不定」の2つの一次因子が高い負荷を示した。最後に大学生群においては、高校生群とはやや異なる結果が得られた。二次因子分析の第I因子には「他者への表出不能」「他者との親和不能」「他者への意識過剰」の3つの一次因子が高い負荷を持つ。そして第II因子には「課題遂行停滞」「他者への配慮欠如」の2つの一次因子が高い負荷を持つ。第III因子には「目標方向不定」の一次因子だけが低い負荷を持っていた。

二次因子分析の結果を比較すると、学校段階が進むにつれて、自己嫌悪感の要因がより分化していくという発達の变化が示された。この変化を図示したものがFIGURE 1である。対人的な要因と対自的な要因に基づく仮説的枠組みに照らして考察していく。中学生群では、人との関係の持ち方への不満(対人的な要因)から生じる自己嫌悪感も、自己のあり方についての失望(対自的な要因)から生じる自己嫌悪感も、ひとつの因子としてまとまっていた。したがって、自己嫌悪感の要因は、自分に対する嫌悪という1要因と考えられる。やがて高校生になると、自己嫌悪感是人との関係の持ち方への不満から生じるものと自己のあり方についての失望から生じるものとに分かれる。高校生群では、自己嫌悪感の要因が分化し、前述の仮説的枠組みと一致する結果がみられた。ところが大学生群では、人との関係の持ち方への不満と自己のあり方についての失望というとらえ方では、十分解釈しきれなくなる。そこで、大学生群の二次因子分析結果から、前述の仮説的枠組みを再考察した。大学生群の第I因子は、高校生群の第I因子に高い負荷を示した4つの一次因子から、「他者への配慮欠如」の因子が外れた因子である。この因子は、相手との適切な間合いをとることに失敗し、人を傷つけてしまう自己嫌悪感の因子を除いた3つの一次因子からなりたっている。その3つの因子とは、「他

者への表出不能」「他者との親和不能」「他者への意識過剰」である。これらからなりたっている二次因子は、次のような自己嫌悪感を表わしていると考えられる。それは自分と他者との違いに敏感になり、人との接し方や人への振舞い方を意識し、ちゅうちょしてしまう場合に感じられやすい自己嫌悪感である。この自己嫌悪感の本質は、人との関係の持ち方にあるのではなく、自己嫌悪感を感じている主体の側の問題と考えられる。主体の側から考察すると、自分の中味がまだ形成されておらず、自信が持てない状態にある。自信がなく気後れしていることから生じる自己嫌悪感と解釈できる。大学生群の第II因子は、「他者への配慮欠如」と「課題遂行停滞」の一次因子に高い負荷を持つ。この2つの因子は、高校生群の二次因子において、それぞれ別の因子に高い負荷を示していたものである。これは、やろうとしていることができない、そして、したくないと思っていることをやってしまうという、自分を統制

できないことから生じる自己嫌悪感と解釈されよう。最後に第III因子は、高校生群と大学生群にみられた「目標方向不定」の一次因子ひとつだけが、高い負荷を示した。これは、自分自身の将来が自分の視界に入りはじめてから現われるものと考えられる。自分がどう人生を送っていくかを見いだそうとしても見いだし得ず、どうしたいのかを自分に問いかけるが、自分でもわからない。このような、自分がわからないことから生じる自己嫌悪感と解釈される。以上順に考察してきたように、大学生群では、自分に自信が持てないことから生じる自己嫌悪感、自己の行為を統制できないことから生じる自己嫌悪感、自己に対する理解や洞察が不足していることから生じる自己嫌悪感の3つがみられた。このように大学生群では、自己嫌悪感を感じさせる要因が、高校生群よりさらに分化していることが明らかにされた。

自己嫌悪感を構造的に分析し、その発達的变化を考

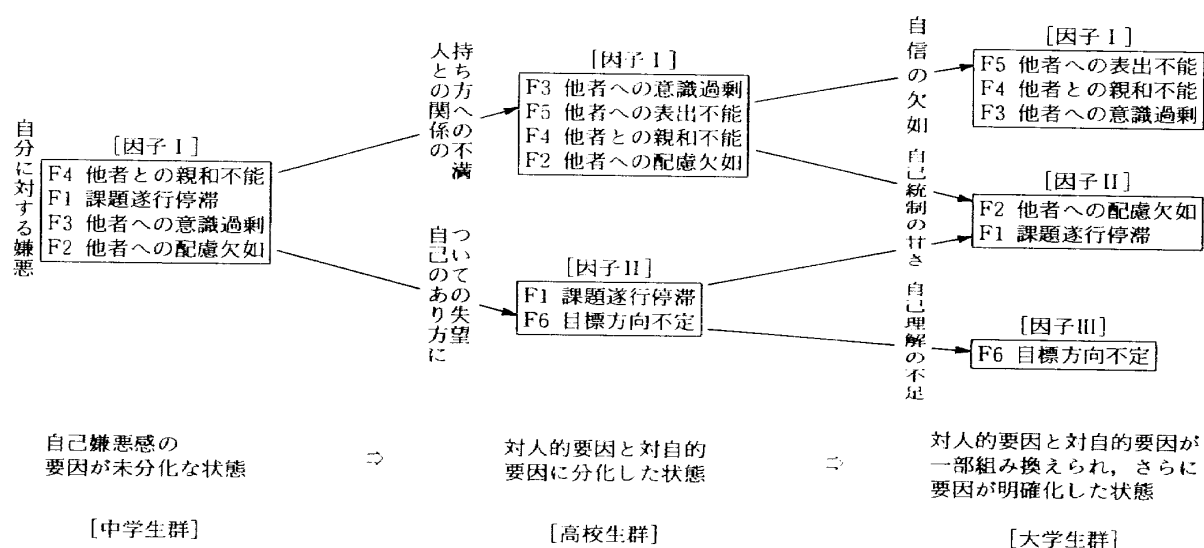


FIGURE 1 青年期における自己嫌悪感の要因の発達的变化

察した結果を以下にまとめる。中学生群ではひとつの因子で自己嫌悪感が説明され、自己嫌悪感の要因は分化していない状態にある。高校生群では自己嫌悪感の要因が分化しはじめ、対人的な要因と対自的な要因の2点からとらえることができる。さらに大学生群になると、これら2つの要因とは異なる3つの要因に分化していることが示された。すなわち、自己嫌悪感はその要因から分析すると、3つの段階に分化していく発達的な変化がみられる。そして、自己嫌悪感の要因が3つに分化した状態では、青年期の自己嫌悪感には、①自分の中味がまだできていないという自信の欠如から

生じる自己嫌悪感②自分の行為を統制できない自己統制の甘さから生じる自己嫌悪感③自分がわからないという自己理解の不足から生じる自己嫌悪感の3つの要素から理解できることが明らかにされた。

引用文献

- 原田 茂 1978 自己へのめざめ 山下栄一(編著) 青年心理学 有斐閣ブックス Pp. 36-46.
 Harman, H.H. 1976 *Modern factor analysis* (3rd ed.). Chicago: University of Chicago Press.
 Izard, C.E. 1991 *The psychology of emotions*.

New York : Plenum Press.

中澤次郎 1982 青年の自己表現と人間的成長 (中澤・松山共編) 現代の青年心理学 学術図書出版
Pp. 188—201.

西平直喜 1959 青年心理学 国土社

西平直喜 1973 青年心理学 共立出版

落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房

高橋由典 1994 対人罪責感論 ソシオロジ, 119, 21—40.

詫摩武俊 1978 青年の心理 培風館

堤 雅雄 1982 青年期における自己対象化と存在論

的危機 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学) 15, 43—54.

追 記

本論文をまとめるにあたり、筑波大学 落合良行先生に格別のご指導を賜りました。また、宇都宮大学 服部環先生、筑波大学 石隈利紀先生、筑波大学 芳賀純先生から有益なご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。調査の実施に際しても、多くの方からのご配慮をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(1993.9.2受稿, '94.6.1受理)